

比較文化論 : 大項目別報告 : 交通・運搬 1600

著者	富沢 寿勇
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	011
ページ	61-66
発行年	1990-03-10
URL	http://doi.org/10.15021/00003695

交通・運搬 1600

富 沢 寿 勇*

- | | |
|----------------------------------|---------------------|
| 1. 頭上運搬・頭部支持背負い運搬・天秤棒
・肩掛け運搬具 | 3. 家屋, 服飾, 身体変工との関連 |
| 2. 焼畑耕作 (1312) との関連 | 4. 頭上運搬と天秤棒の地理的分布 |
| | 5. 木轆, 輿, 牛車, つり橋 |

本項において対象とされている文化項目は、頭上運搬 (1601)、頭部支持背負い運搬 (1602)、天秤棒 (1603)、肩掛け運搬具 (1604)、木轆 (しゅら) (1605)、輿 (人間を運ぶため) (1606)、牛車 (1607)、つり橋 (1608) の 8 項目である。各項目の存在が確認される民族数は、頭上運搬が48、頭部支持背負い運搬が62、天秤棒が39、肩掛け運搬が50、木轆が6、輿が17、牛車が25、つり橋は19である。本論においては、比較的サンプル数の多い頭上運搬、頭部支持背負い、天秤棒、肩掛け運搬にとくに焦点を絞って、各項目の地理的分布と、これらに関連すると思われる他の文化項目との相関性について吟味したい。

1. 頭上運搬・頭部支持背負い運搬・天秤棒・肩掛け運搬具

先回りの中間報告において、福川は天秤かつぎ (1603) と頭上運搬 (1601) との相関関係の強いこと、いずれも平地に出現する頻度が高いこと、そして、これらの運搬法が水平や平衡を保つ必要性をもっていることから、これらを平地型とし、一方、山坂道における運搬や焼畑耕作により適していると思われる頭上支持背負い (1602) と肩掛け運搬 (1604) を山地型として、それぞれ分類している [福川 1985: 45]。頭上運搬と天秤棒が身体の水平移動を機軸としておこなわれるのにたいし、頭部支持背負いや肩掛けは、垂直移動に有効ということは確かにいえるだろう。問題なのは、水平移動型同士、垂直移動型同士、水平移動型と垂直移動型同士の関係が、どのような相関をなしているのかということである。

* 静岡県立大学国際関係学部

まず天秤棒をもちいる39民族のうちの22民族（56%）が頭上運搬を、逆に、頭上運搬をおこなう48民族中、22民族（46%）が天秤棒による運搬をおこなっている。ところが後者48民族のうちのおなじ比率（22民族）が肩掛け運搬も併用している。この意味で、頭上運搬は天秤棒とも、肩掛け運搬とも、同じ相関度を示している。一方、肩掛け運搬をおこなう50民族のうちの21民族（42%）が頭部支持背負いを併用し、また頭部支持背負いをおこなう62民族のうちの21民族（34%）が肩掛けを併用している。したがって、天秤棒と頭上運搬の相関度と比較すると、頭部支持背負いと肩掛けとの相関度はやや低いといえる。

ところで頭上運搬をおこなう48民族中、18民族（38%）は頭部支持背負いもおこなっており、これは頭部支持背負いを行なう62民族の全体の29%にあたる。この点で、頭上運搬と頭部支持背負いは、かならずしも相互に排他的な文化項目ではなく、民族によっては相互補完的な関係を示していると解釈するのが妥当であろう。また、肩掛けをおこなう50民族中、22民族（44%）が頭上運搬もおこなっているので、この両文化項目の併存の頻度も、かなり高いといえる。

2. 焼畑耕作（1312）との関連

つぎに、上記4種の運搬法と山地に多い焼畑耕作との関係を見ると、本研究においても、頭部支持背負いをおこなう62民族のうちの53民族（85%）が焼畑耕作をおこなっており、最も強い相関を示している。また、肩掛け運搬具をもつ50民族中、40民族（80%）が焼畑をおこなっている。しかし一方で、水平移動型の頭上運搬をおこなう48民族中の40民族（83%）も焼畑を行なっているし、また天秤棒をもつ39民族中の26民族（67%）にも焼畑が見られることに注目しなくてはならない。この事実を考慮すると、水平移動型の頭上運搬・天秤棒と焼畑耕作とは、かならずしも相互排他的な文化項目の関係を構成しているわけではないことがあきらかとなる。

3. 家屋（2100）、服飾（2300）、身体変工（2400）との関連

頭上運搬と天秤棒が水平移動型の身体技法と、頭部支持背負いと肩掛け運搬が垂直移動型の身体技法とそれぞれ関係していることは、他の文化項目とこれらの運搬法との相関度からも、ある程度うかがいしれる。

まず家屋の構造から見れば、杣上家屋（高床）（2107）は出入りに垂直移動を要し、

平土間家屋（2108）は水平移動を基本とするといえる。そこで、上記4種の運搬法のいずれかをおこなう諸民族が杙上家屋を有する比率と、平土間家屋を有する比率とを比較すると、杙上家屋をもつ比率が最も高いのは肩掛け運搬（50民族中、35民族：70%）のケースで、ついで頭部支持背負い（62民族中、40民族：65%）である。逆に平土間家屋の比率が最も高いのは天秤棒運搬（39民族中、24民族：62%）、ついで頭上運搬（48民族中、26民族：54%）である（表1）。この意味で、頭部支持背負いと肩掛け運搬は垂直移動を機軸として杙上家屋と機能的に相関し、頭上運搬と天秤棒は水平移動を機軸として平土間家屋と相関しているといえよう。

同様の事実は、ある程度、服飾についてもいえる。とくに腰巻（2308）のように、布が大腿部に密着する類のものは垂直移動よりも水平移動により適していると考えられるが、上記4種の運搬法のいずれかをおこなう民族群のなかでも、腰巻使用の出現率が最も高いのは頭上運搬（48民族中、32民族：67%）と天秤棒（39民族中、26民族：67%）であって、これもやはり、水平移動を機軸として、機能的な相関関係があることを示すものと解釈される（表1を参照）。

なお、その他の文化項目で、思いがけず注目されたのは身体変工、とりわけ耳朵穿孔（2402）との関係である。上記4種の運搬法のいずれかをおこなう諸民族における耳朵穿孔の出現率はいずれも高いといえるが（表1参照）、これは運搬と直接関わる身体の主要部位（頭、肩、背）に近い耳朵への強い関心が共通してあることとも関係があるかもしれない。さらに耳朵穿孔がとりわけ頭上運搬や天秤棒と相対的に、より強い相関を示しているのも注目される（表1を参照）。これは思弁の域を出ないが、これら平衡感覚を要求される運搬法と、耳に平衡器官がふくまれている生物学的事実とは

表1 家屋・服飾・身体変工との相関

他の文化項目 との関連	頭上運搬 (1601) (N=48)	頭部支持背負い (1602) (N=62)	天秤棒 (1603) (N=39)	肩掛け (1604) (N=50)
杙上家屋 (2107)	29 (60%)	40 (65%)	24 (62%)	35 (70%)
平土間家屋 (2108)	26 (54%)	26 (42%)	24 (62%)	17 (34%)
腰巻 (2308)	32 (67%)	36 (58%)	26 (67%)	32 (64%)
耳朵穿孔 (2402)	36 (75%)	40 (65%)	28 (72%)	33 (66%)

数字は、重複する民族の例数（百分率）をあらわす。

まったく無関係ともいえないのではなからうか。

4. 頭上運搬と天秤棒の地理的分布

上述したように、天秤棒をもちいる民族の56%が頭上運搬を、逆に、頭上運搬を有する民族の46%が天秤棒をもっているから、ほぼ半数の民族群はこれら二つの運搬法を併用し、残りの半数は、いずれか一方の運搬法しか報告されていないということである。そこで頭上運搬のみのグループを④、頭上運搬・天秤棒併用グループを⑤、天秤棒のみのグループを⑥として、その地理的分布を一瞥すると、とくにオセアニア地域に大きな特徴が見えてくる。すなわち、メラネシア・ニューギニア地域では④が圧倒的であるのにたいし、ポリネシアでは⑥が支配的である。つまり、メラネシア・ニューギニア地域の8民族 (Kilenge, Kaoka, Santa Cruz, Pentecost, Iwam, Nimo, Buna, Dobu) が④で、ニューギニアの2民族 (Gidra, Trobriand) が⑤で、⑥に入るのは、わずかに1例 (メラネシアの Owa Raha) にすぎない。一方、ポリネシアの7民族 (Hawaii, Tuamotu, Austral, Marquesas, Easter, Tongareva, Pukapuka) は⑥群を構成し、Uvea の1例が⑤に入るが、④の存在は報告されていない。この意味で、頭上運搬中心のメラネシア型と天秤棒中心のポリネシア型という大まかな構図が浮かびあがる。

メラネシア型の④群には上記8民族のほかに東南アジア大陸部の Mon, Lamet, フィリピン・台湾地域の Bukidnon, Kalinga, Yami, Tsou, Rukai, Saisiat, 大スンダ列島の Toba Batak, Minangkabau, Iban (Sea Dayak), および小スンダ列島・モルッカの Endeh, Lio がふくまれる。

一方、ポリネシア型の⑥群には、中国南部の湖南 Miao, Li, アッサム・ビルマの Cak (Chakpa), Shan, Palaung, インドシナ・タイの Cambodian, 台湾の Puyuma およびマイクロネシアの Ponape を経て、上述のポリネシアの7民族へつながるラインと、大スンダ列島の Sundanese がふくまれる。

中間的な⑤群は、アッサム・ビルマの Burmese, インドシナ・タイの Vietnamese, Tai Yuan, フィリピン・台湾の Bontok Igorot, Tagalog, Ami, Paiwan, ミクロネシアの Truk, ポリネシアの Uvea, ニューギニアの前記2民族, 大スンダ列島の Javanese, Southern Toradja, Eastern Toradja, Bugis, Makassarese, Sumbanese, Sasak, Wemale から構成される。

以上から、地理上の境界線を引くと、頭上運搬中心の④群として、台湾の多数の民

族からミクロネシアの Palau を経由してメラネシア・ニューギニアへという連続ラインが注目され、また天秤棒中心の㊦群として、台湾の Puyuma からミクロネシアの Ponape をへてポリネシアにつながるラインが浮上する。ミクロネシアに関しては、その中間地域 (㊦) として、Truk が位置づけられる。東南アジア島嶼部に関しては、㊦または㊦が主流だが、Sundanese が唯一㊦群に位置づけられ、興味深い。また㊦が圧倒的なポリネシアで唯一、㊦に属する Uvea の位置も注目される。

5. 木橋、輿、牛車、つり橋

木橋 (1605)、輿 (1606)、牛車 (1607) が見られる民族は、水稻栽培 (1310) をおこなっている場合が圧倒的に多い。木橋が報告されている6民族のうちで、水稻栽培が報告されていないのはスマトラ南部の Orang-Abung の1例のみであり、輿が認められる17民族のうちで、水稻栽培の認められないのはアッサム・ビルマ地域の Palaung の1例のみである。牛車をもつ25民族についても、その大半を占める21民族 (84%) は水稻耕作をおこなっていて、これら3種の運搬法と水稻耕作との相関性の強さを示している。

個別的に見ると、牛車の分布は中国南部からアッサム・ビルマ、インドシナ・タイ、大スンダ・小スンダ列島・モルッカおよびフィリピン・台湾地域にかけてひろがっているが、マダガスカルを除いて、オセアニア地域にはその存在が報告されておらず、その意味で東南アジアとオセアニアの一つの境界を示す文化項目となっている。

木橋については巨石文化・巨石記念物 (4212) との関係が注目されているが [福川 1985: 46]、実際、木橋を有する6民族のうち、巨石記念物が報告されていないのは台湾の Puyuma の1例のみであって、両文化項目間の機能的相関性が推定される。ただし、今回のデータにおいてもオセアニアの巨石文化との関係については、Tonga, Easter, Marquesas など期待された木橋に関するデータが空白もしくは不十分なので、不明のまま残される。ところで木橋を有する6民族はすべて奴隷制 (3509) をもつ。また1例 (Orang-Abung) をのぞいて、いずれも身分階層 (3502) をもち、同じく1例 (マダガスカルの Tanala) をのぞけば、いずれも世襲的統率者 (3503) をもっている。換言すれば、6民族のすべてが少なくとも身分階層か世襲的指導者のいずれかを有していることになる。

輿は基本的に貴人を乗せるための運搬法と考えられるが、実際、輿が報告されている17民族中、10民族は宮廷 (3501) をもち、12民族は世襲的統率者 (3503) をもち、

14民族は身分階層（3502）をもつ。つまり17民族中、宮廷も世襲的統率者も身分階層も、いずれももたないのは中国南部の **Pai** と湖南 **Miao** の2例にすぎない。ちなみにこの2例については、「生活水準の高い者の伝統的な旅行法」というリップス (Lips, J. E.) [1964] を引用した福川の説明がすでにある [福川 1985: 46]。

ところで輿のある17民族中、13民族（76%）が天秤棒（1603）による運搬をおこなっている。これは運搬対象が前者は人、後者はモノという差異があり、その重心の位置も異なるが、棒を機軸とした水平移動という身体技法上の共通性があることと関係があるかもしれない。また、これら17民族のうち、1例（台湾の **Paiwan**）を除くすべてが単純土葬（4101）をおこなっている。これは埋葬対象の運搬法と関係があるケースが推定される。

つり橋は、中国南部からアッサム・ビルマにかけてと、インドネシアを中心として東南アジア島嶼部にかけてひろく分布する。このつり橋についても、先回の報告で福川がグレーブナー (Graebner, F.) のいう、ニューギニアを中心とする弓文化の特徴の一つとしてのつり橋の意義について言及しているが [福川 1985: 47]、今回のデータでは、ニューギニアの33民族からは、わずかに1例 (**Seltaman**) のみにつり橋の存在が報告されているにとどまっている。